染崎延房輯

近世紀聞

四編

文久三癸亥年
自九月至十月

巻之一

イ13
530
10

門 イ 13
530
10

柒崎延房輯
鮮齋永濯畫

近世紀聞 四帙 三冊

東京書肆
金松堂發行

近世紀聞第四輯序

盈るものハ必ず缺け衰るものハ復盛んなるは何れも皆かく海外萬國の形勢を按るに甲ハ乙を併呑し丙ハ丁を蠶食して仍て時勢の變革ある興亡廢立間なく時なし我が　皇國の如きに於てハ獨立不羈の神州にして他に比類ある所にあらねバ中古頼朝鎌倉に起りて武將の任を冒してより北條足利の乖戾ある　朝威漸次に衰へしが徳川の開祖四海を

治めて上 勅旨を遵奉し下ハ四民を慰撫せしが遂に三百年間の昇平を楽しミしも亜船一回来りてより外患内憂止む間なく或ハ因循姑息に泥ミ又ハ過激の暴挙に渉りて奸臣賊士と罵られ真の奸臣賊士罪ありて憂國の素志ありながら着眼をちがへ違へるより勢ひ止むを得ざるより出づるもの然るに大政復古して今開明の世となりしに

彼塞翁が駒にして思へバ長夜の夢にて覚て僕黄嘴を顧ミず近時の事跡を輯むること茲に至りて稍四帙然となる事業半ならずして猥りに紙價を費やさしむるのミ午睡を醒覚の料ならむと尚懲ずまた稾を脱しつ

于時明治第七夏至前一日蜀魂屢々報且

延房迂叟識

秋水銛寒三尺刀。滔天妖霧奈難消。
従令一死為河嶽正氣千秋護本朝。

戸原継明 称卯橘

おくれなは梅も桜に劣るらん
魁てこそ
ちらはちりなめ

南八郎 本名川上弥市

縦令藩人評賊生
天朝容我下忠名

平野國臣 称二郎

小金山
ありしむかしの影もあらねと
御幸ハたえて年経
しけり清らん

三玉安麿 称三半

近世紀聞四編巻之一

東都　染崎延房輯

○南山の義挙鎮静する事

再説彦根勢ハ此日〔文久三亥年九月八日〕天忠組と戦ひて杤が原椛の木乃二箇所の砲臺を乗取りしかバ高の知れたる烏合の小賊翌ハ夙く天の川なる賊寨に押寄せて一挙に功を奏せんと其夜一番手の兵士に於てハ彼山中に宿陣せり然りとて敵兵の何時襲来做んも知れざれバ甲夜の程ハ番兵を出口々々に差出し陣所ハ数箇所に篝火を焚き専ら兵威を示せし

も漸次に小夜の更るに随ひ怠ることハなけれど
を山間ハ只寂寞として耳に遮ぎる物とてハ梢に
猿猴の叫ぶ声谷乃水音のミにして敵の襲ハん氣
色も在らねバ昼の疲労に覚ずも或ハ幕を躬に絡
ひ兜を枕に倣しあどしく寝る者もありしに睡めむ
篝火も稍絶々に八日の月も入果し四辺小暗き真
夜中過ぎ天忠組の方にてハ逞兵特つて五十人各得
物を携へて間道よりして押寄せ来つ敵の油断を見
るよりも時分ハよきぞとや蒐れと言ふより疾く
浪士の面々小銃数發打掛れバすハや敵こそ襲ひ

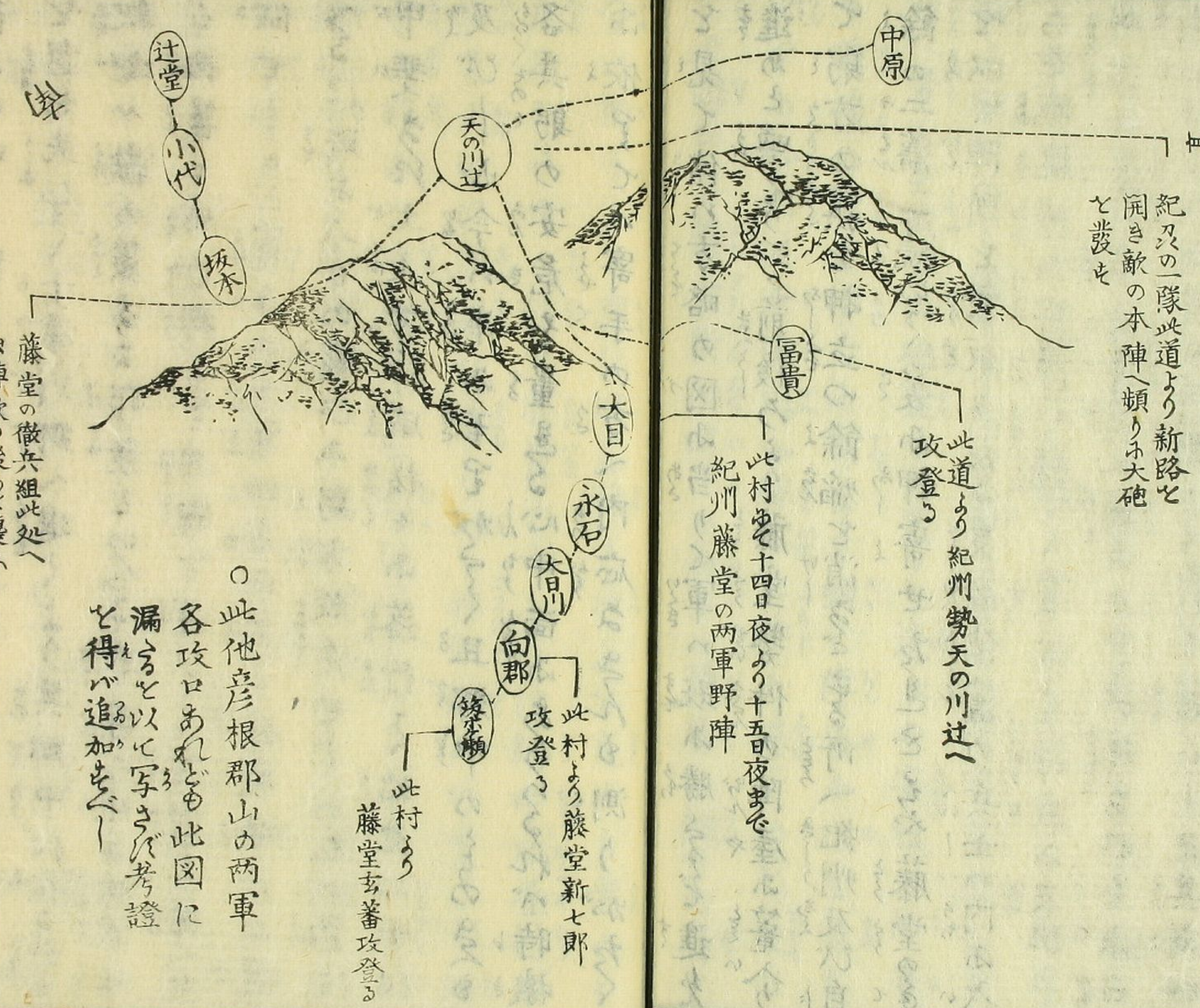
たれと慌忙く彦根の兵卒鎗よ太刀よと言ふ処へ松
本をじめ浮浪の輩面も掉らず砍入つゝ当るに任
せ〳〵薙立たり然れども彦根の陣中にも精兵なき
に在らざれバ死力を竭して血戦せしが固より夜
討の事なれバ敵にハ則ち暗合にて躬かさハ夫等
乃設けなれ共同士討するも尠からず須臾がほ
どに二三十人或ハ討れ或ハまた疵を負へる者在
りしかバ彦根の藩兵堪へかねて出つと崩れて敗
走し儘に浪士等程よく追棄て渠が遺せし火薬の
属ひを分捕して退けり慿りし後も寄手よる屡兵

を出して戦ひ数度に及ぶと雖も軍師安積は楠公の聊か遺風なりと云はれ最も軍慮に長ける者故猥りに弾薬を費さず士卒を残はざるを主として切所々々に小勢を出して機に臨み変に応ずる防禦の策を施して或は吉野郡山口其他近郷近在へ兵士等を遣して農家を募りて金米を出させ粮米塩噌の類をば専ら山寨に輸ばせるよし其沙汰寄隊に聞へしかば斯の如くに敵方へ兵食漸次に備はる時は容易に落居做し匝からんと因循すべき時節にあらず先や総軍大挙して一時に砦を攻落さんと四藩士大ひに奮發して此月

十四日の早天に藩々何れも手配を定め紀州勢は二隊に分れて一隊は冨貴村の方へ進發し一隊は高野口より栈めば藤堂勢は簗が瀬より大目村へと押寄せたる此同勢のうちに於て徹兵組と号したる鉄砲方を二百人途中よりして分配なし南の山へ分登らせ密く敵の後を襲はしむ其他彦根郡山も持場を定めて攻蒐せ天の川なる陣営を此日は是非に攻潰さんと諸藩士奮戦なす程に天忠組の方にても侮りがたく思ひにぞ各所の攻口へ兵士を配りて爰を先途と防戦せり然るに藤堂の徹兵組は山手の方へ攀登り道なき処を

伐開きたる木の根に取付き岩間を傳ひ辛うじて山寨の後ろ乃山に至りしに彼天の川乃陣営を直下に見下せる所なれバ須臾も猶豫あるべからずと二百人なる鉄砲組が筒先揃へて打蒐けり然れバ天忠組にてハ常に道なき所より後の山へ敵兵の廻るべしとハ毫知らバ正面に對ふ敵をのミ頻りに防ぎ居る事より陣中空虚なる所へ量らず俄かに砲發せられしかバ遉がの安積五郎等も前後の敵を拒ぐに術なく頓て陣屋に火を放ち烟りに紛れて十津川へ総軍一時に退くにぞ表の口に對ひたる藤堂新七以下の兵士ハ陣屋に烟りの揚る

を見て偖ハ方略の図に当りて軍ハ既に勝たるぞ進めよ進めと喚たりつゝ前後ろより藤堂勢件の陣屋に篭入りて躬方の旗を押立つ餘焔を消などする所へ紀州及び自餘の二藩も續いて爰に押寄せたれどもはや藤堂の手を以て陣所を乗取りたる事故他藩の兵士ハ内に入らず咸近傍に野陣を舗て爰にて評議に及びし所浪士等ハ咸十津川へ退きたりとの趣なれバ出出口に兵士を分けて嚴しくこれを護らしめ其夜ハ开処に宿陣して十津川郷へ攻入るべき手配りをなん為たりとぞ偖て又天忠組にハ思ひよらざる敵兵の



○此他彦根郡山の両軍各攻口あれども此図に漏るゝを以て写さず考證を得ば追加すべし

後ろの山より襲ひしバ彼天の川乃辻ふ構へし陣所を忽ち失ひて十津川郷へ退くより其郷中に在る所の釈迦が嶽の麓なる別衆といへる要害の地ふ総軍姑く楯篭り尚近郷より兵粮を運びて防禦の備へを做せしかど寄手の大軍四方ふ充て猛威熾んふ震へるに既ふ八日の戦ひふ躬方敗走せしのちハ憑とも甲斐なき土人等ハ咸抜々ふ落行て始ど二千に及びしも今ハ半ふ至りがたく且郷中のものさへも各其躬の安危を量れる心中面ふあらわるれバ時機ふ依りてハ寄手の方へ内応なさんも測りがたく

今ハ斯らんと思ひけん豫て決死を究めし者のミ凡そ七八十人計り其月の十七日に郷中風屋村ふ於て大いに酒宴を催しつゝ杯数巡ふわたりし頃中山殿ふハ席中ふうち對ひつゝ言いけるやう小子不徳短才なる我諸彦のうえに押立られて主将の席を汚せしも偏ふ攘夷の先鋒を做さんと計り乃素意ふして更に他念ハなかりしふ一朝京師の変動かくて機會を失ひたりしより遂ふ討隊を向けられたるも諸兄の憤發ありし中へ屢寄手を悩して武門のおもてハ相立たるを何時までか餘命を惜

ごとく倫名を汚すとも末代までの恥辱なるん今日最期の情を尽しく心静かに生害致すべし是天運のいたる処何ぞか憾と何ぞか厭ハん諸彦の主意奈何ぞやと坐中を屹度見渡したまへバ鉄石すどめ自餘の有志等実ふ理りと思へるのミいまだ田答も在らざりし案下松本謙三郎ふハ膝を找めて言へるやう尊慮寔ふ至極せり然れども僕がまる退く考ふるに死ハ易くして生ハ難かり殊更君ハ高位の貴族咱們ごとき草莽の徒と尸を倶ふうち交へ刀の錆となさまれん吏遺憾きのかぎりなる

されや今長州ふハ七卿の既ふ在すのしなれバ是より彼地ふ落させぬるひとく三條以下の公卿方と篤と御示談在らせらるゝ再び攘夷御親征を計らせたまふ其時ハ縱ひ我輩この地ふして空しく命を殞すとも素志を遂しに異なる事なく死後の滿足なららへあらじ死するとも我が義士ふもいはぬを再思を加へらるゝぞやと面を正しく諫むるほど次席ふ扣へし寅太郎が覚へず小膝を搏と打ち松本の論説得て妙なりよしや討手の軍勢が十重廿重ふ園ミたりとも咱們心を一ふして砍死するに至り

てハ一方を蹴破りて君をバ落しまゐらせんに何条叵き
事あらんと言へバ藤本安積ハ更なり牧岡鳩平池蔵太其
他有志の面々も松本吉村両雄の辞に次で種々に退去
を勧めまゐらせしかバ中山殿にも左右と始めハ辞ひ給
ひしかど斯迄諸士の思込みたる芳志を虚にせんもあ
らばと遂に其意に任せられバ諸浪士何れも安堵し
く是ぞ此世の餞別と口に出さねど心に誰とも思ひ
ぬ者もあらねバ這日ハ酔を竭き迄謳ひ噪戯き樂しミ
ける慿て後天忠組ハ竊に退去の準備をなし紀州口へ
と心ざし那所の動静を探らせしに國境にハ数千の人数

最厳重に警固して通行慥ひ叵しと聞えバ十九日の
夜に至り郷に宴席にて會合せし倔強の浪士數十名
中山殿を守護しつゝ十津川郷を抜出て釈迦が嶽の
裏手なる間道をうち通り吉野川乃上に当れる彼和
田村に到りつゝ其夜ハ其処に止宿なし次の日乃早天
に同村及び近村より人夫許多を呼集め長持其餘の
荷物を負ハせ大将分の面々ハ咸宿駕篭に打乗て鷲家
村迄赴きける夫より伊勢路へ到るべき先觸を出し置きて
不意に浪花へ出んと言ふ心構へを為りしに此時彦根
の一番隊より豫て見張を出し置しが綷云云と注進なす

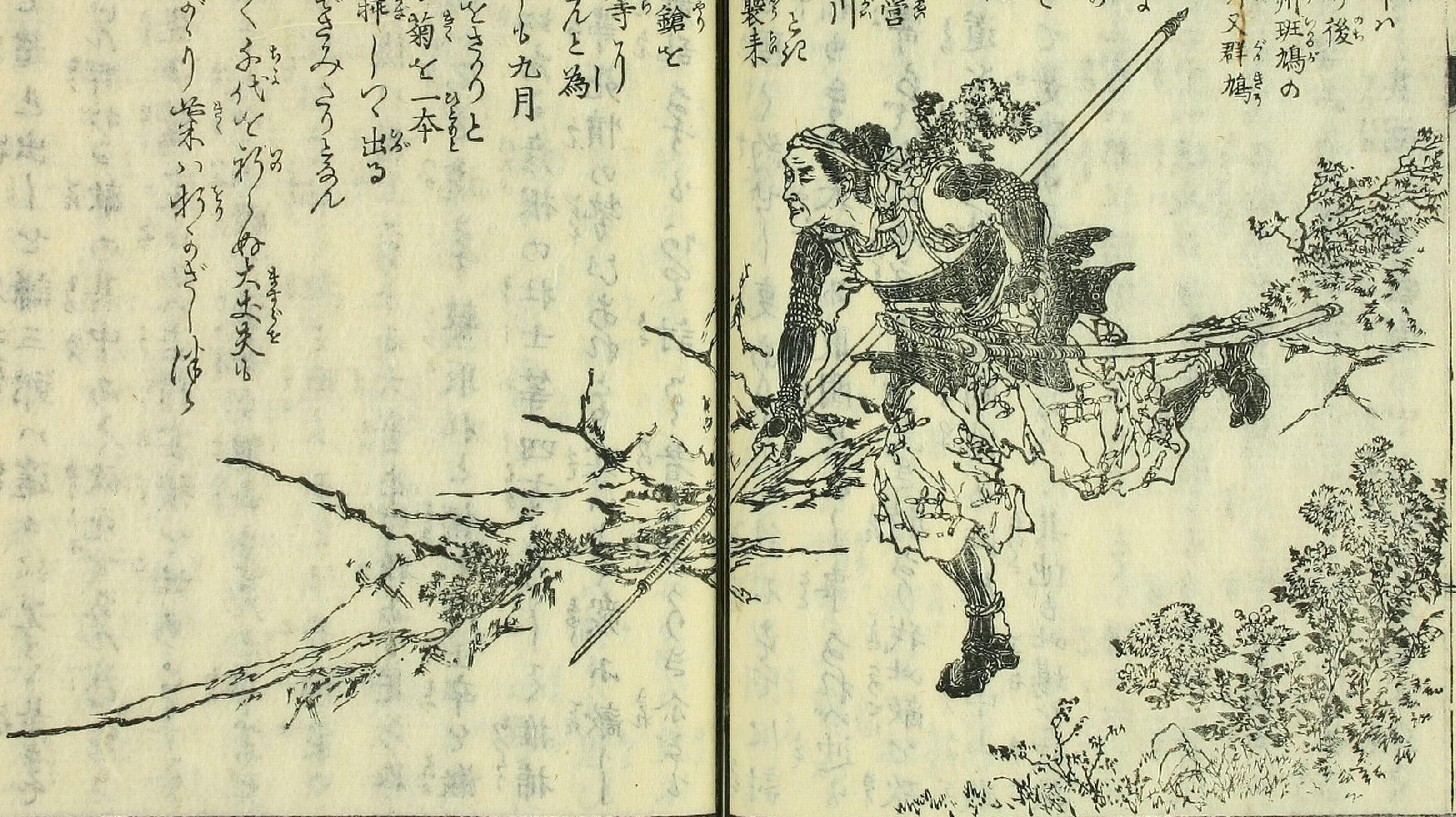
にぞ洞川と言ふ所に扣へし二番手貫名筑後の隊へ此よし
至急に通達なし程もあらせず一番手ハ鷲家口へと押寄さ
せ浪士の方にも豫てより敵ならバ砍抜んと思ひ設けし事
なれバ更に臆せる氣色もなく一挙に這処を蹴破り往ん
と敵の放てる砲煙の下を潜りて我〻寄り手元の勝負を
挑むにぞ這方も名にあふ彦根の精兵迯さこなの落武
者奴一個も餘さず討取れと火花を散して戦ふ折しも
貫名筑後の二番隊が洞川よりして帰し来つ敵の後を
襲ふにぞ天忠組も剛なれども百にも充ぬ小勢なるに敵
に新手の大軍加はり火水の如く攻立まぞ吉村安積等

甲乙ハ貫名の陣にうち對ひ姑く防戦なすうちに藤本
松本以下の面々僅かに血路を砍開き中山殿を守護
なして辛く其場を落延し不往方に紀州の兵あらて忽ち
路を遮ぎり案下藤本鉄石ハ衆に向ひて言へるやう今此
敵を砍抜けざれバ後より井伊の大軍の必ず追蒐け来
るべし我等ハ初度の戦ひに既ま痍傷を被りたれバ長く
御供なしがたし仍て此場の殿せんなん身等是非に侍従
殿の無異を計らひ給へとて総勢僅かに三四十人群る
敵乃真中へ會釈も做さず砍つて入りたる中にも藤本
鉄石ハ必死を究めし事なれバ日頃の英氣十倍して

敵も節ある迄に頻りに奮戦なせしかバ遉がに猛き紀州勢も尠しく色めき立たる虚間に松本以下の輩ハまつし一方を砍抜たり爰に至りて鉄石なども充十名計りの浪士等が或ハ討れ或ハまた虜となりしもありと言ふ尓程に松本等ハ烈しき両度の切戦に浅疵を負ねハ罕なれども更に弱りし気色も見せず頻りに道を急ぐにぞ日も漸や西に傾く頃何れの兵士か籏いろのいまだ安定に見へ判ねど又もや前路を妨ぐるを松本屹度うち見やりて這処まで寄隊の備ありて繋かへらんの威勢ひ加り隊て藤本吉村とハ死を同日に

為すべしと固く約せし吏ありしに鉄石までに討死しつ吉村もまた大軍に取囲まれし事なれバ迚も存命思ひも寄らず今ハ此方の死すべき時なり我此敵を砍破りて必ず道を開くべけれバ牧岡池の両雄ハ中山殿を守護なして是非に長門へ落らるべく其他も此場を砍抜て命を恙なからん者ハ君に陪従致さるべしとて讃三郎ハ真先に寄手の中へ砍入るにぞ中山殿ハ今更に勢ひ禁むべきにも在らねバ各必死を定めたる夫が中にも松本ハ今を最期と思ふにぞ宛然猛虎の荒るゝ如く四方に当るく奮戦せし其間に池牧岡ハ中山殿の左右に立て

伴林六郎光平ハ
初め浮圖氏なりし後
蓄髪して和州斑鳩の
里に住し蒿斎又群鳩
の隠士と号して
最も和歌を巧ミ
せり豫て憂國の
素志あるを以て
這回の義挙に
加りしが既に
天の川辻の陣営
敗れて十津川
郷に竄保しと紀
彦根の一軍襲来



せしかバ光平鎗を
押取て壮士等と
打交り駈出さんと為
たりしに折しも九月
九日なれバ今をさかりと
谷陰に咲つる菊を一本
手折りさし挿して出る
とて斯く口ずさみけるとぞ

身を捨て千代を祈らぬ大丈夫ハ
もちてかざり菊ハ折くのぎし侍

辛く圍みを遁れ出しを謙三郎ハ遥かに見て是まで
なりと思ひけん群がる敵の其中に入て斫死をせん為なり
とぞ是より先に鷲家口にハ吉村安積を始めとして
遅兵凡二三十人中山殿を後安く退去させんと思ふにぞ
彦根の兵に抗ひて姑く挑み戦ふなれどに井伊家の
隊長貫名筑後ハ馬上ながらに大音あげ敉にも足らぬ
鼠輩の小賊一名も遁さず繋取れと頻りに士卒を激
ませぞ惴り切たる彦根の壮士等四方より推して捕
稠まじ浪士等死憤の勢ひあれども寡ハよく衆に敵し
難く堪へず散乱なすも何れ討るる者も多かりき尓ども

吉村寅太郎ハ其躬に数箇所の疵ハ負ふたれど更に
一歩も退かず衆に勝まて奮戦せしが今ハ断うと思ひ
けん敵の中をバ斫抜て人家の軒に駈入りつゝ心静かに
自殺せり此時迄も安積五郎ハ囲みし敵の中を去らず
秘術を竭して戦ひしが終に勢ひ究まりて敵乃虜
になりしが其餘名たる勇士等も或ハ討れ生捕られ
て残兵四方に散乱せり前話休題再説牧岡鳩平池蔵
太等ハ中山殿を守護しつゝ稍敵中を抜出て十町
計走る程に大澤逸平以下の浪士等総て四名と
言へるの圍みを斫抜け慕ひ来しかバ藏太等大いに力を

得たるに何時の程にや日は昏て折しも甲夜暗なり
けれバ忍ぶに便りよきのミかハ固より牧岡鳩平ハ這処等の地
理に委しけれバ間道をのミ經行しが此後ハ敵に出會ず
既に大和も出離れて稍河内路に差かゝる竹内峠に至
りし事故今ハもや心易しと同所の酒店に立寄て酒食を
做しつゝ居る折から旅装せし一人の武士が戸口を通り掛
るにぞ這奴に動静を問試んと大澤逸平立出て彼の
武士を呼止めて和殿ハ何れの御藩なるか何処へ御出ばや
と問掛られて立止まり僕ハ高取の藩士にて主用にて泉州
迄罷越したる帰路なるが何等の故にか尋ねあるやと問ひ

返されつゝ打頷きさん泉州へ往れしとなら是より大坂
迄の間警固何箇所程ありやと問るに越き何とやら合
点行ぬと思ひけん我等ハ至急の用向にて通行為る
事なれバ夫等の事ハ心付ぬ僣ながら各方に於ては何れの
御藩にやぞと再び問ハれて打咲ひ我輩ハ咸天忠組に
て最早引取しへバ和殿大和へ帰られなバ此旨稟し達
されよと言棄奥へ立入るにぞ夫と听くより件の武士ハ
うち駭きたる面容しつゝ足速になん行過たる実に浪士等が
勇悍なる今落人となりながら尚白地に天忠組と名告て
横行なせる事大膽不敵の行跡と酒店の主翁が語りしとぞ

偲て中山卿以下の衆は件の酒店を立出しが本街道へ行ずし
て河州駒が谷村より間道を辿りつゝ其日下晡の頃大坂
道頓堀に到て旅籠渡世を做せる所の近江屋方へ立寄
りしも中山侍従殿及び牧岡池の三個は途中より駕
篭に打乗り其餘は歩行にて来りしと言ふ偖彼七士は近
江屋なる姑く座舗に打通りて主市次郎と言るを呼びて
酒肴又入湯をも致したる旨注文なし且土佐堀迄用向
有れば至急に茶船一艘を雇ひ呉よと命ぜし後当今の
京師の摸様又は大和の動静なんど餘所々々しげに詰ねら
るを打聴ながら市次郎は中山殿の躰をみるに年齢廿

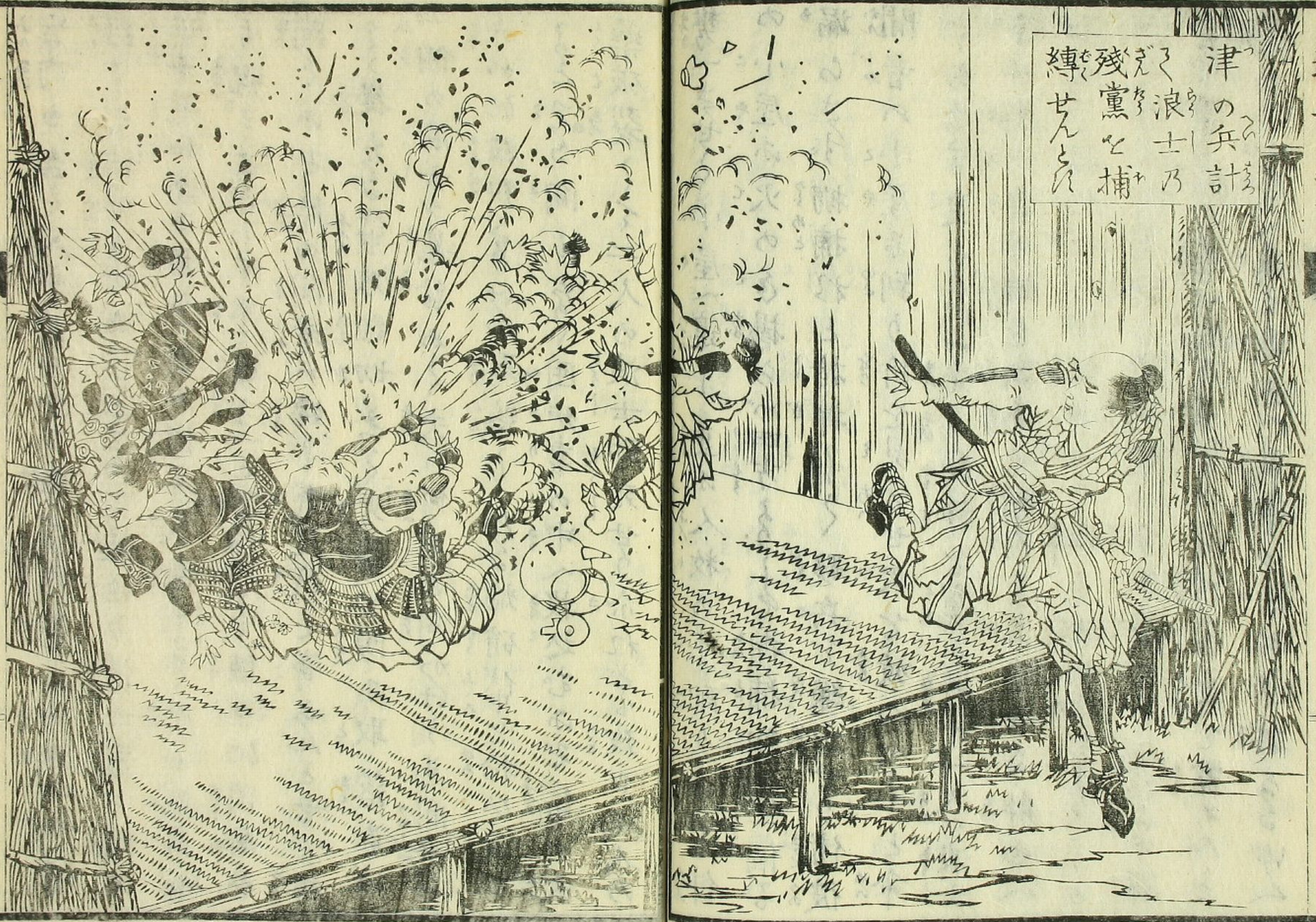
一二なれど容貌至つて美艶なるが惣髪の髻を扣線を
もて絞りたる其形容凡庸ならずと見ゆるに又着服の
容躰も緋縮緬の長襦袢に縞縮緬の小袖を着下し紺
木綿の股引の上に脚半を当られたり其餘蔵太鳩平以
下は着服各其差あれど何れも股引脚半にて丸合羽をば
打掩へる風躰怪しき所もあれば京大和の摸様なんど
程なく返答なしつゝも軈て其座を退きしが此頃当所町奉
行より聊かにても疑はしき旅人の来りなば速に届け出
べく倘隠し置き他より泄なば曲事たらんの趣きを
厳しく觸示されたる叓故市次郎にも閣きがたく直さま

右等の趣き於奉行の廳に稟し出れば是必ず大和にて
脱走致せし浮浪士ならんと猛可に捕亡の手配をして時を
移さず人数を差向け彼近江屋の前後を圍ましめ稍々踏
込んと為たりしに是より先に七士等は速くも夫と推し
けん俄かに酒食入湯を命じたりしも断りて茶船を雇
ひ打乗りつゝ土佐堀辺へ急ぎ行き其処にて一同上陸なし
長州侯の藏屋敷へ恙もなく入込みたり偖捕亡方の面々
には近江屋方と浪士等が立去りしと聞くよりも
直さま跡を追ひ蒐しに今藏屋鋪へ這入ると言ふ後ろ
姿を見留し故彼門前迄押寄せて只今これに入込し

七人の武士に不審の廉あれば急速差出さるべしとの旨
藏屋鋪詰の者へ厳しく稟し達せしかど右筋の者は
一人も立入らざる由の返答なく種々掛合に及ぶと雖も
差出すべき筋にあらねど遂がに諸侯の藩邸へ猥りに
込む事もならざれば彼藏屋敷の前後は更なり水陸
数箇所に見張を置きて専ら探索為たりしに奈何な
して抜出たりけん中山殿以下七人はその夜竊かに
に船路より長門へ往迄たりとなん然れども大和にては
藤本なんど名ある浪士は大方討死為たりしかど
鷲家口の戦ひにて四方へ散乱なしつゝも尚死後れし

面々ハ奈何にもまして浪花に到り中山殿の安危をバ聞定めんと思ふにぞ所々に潜みて在りと雖も四家の兵士等益夜となく専ら浪士の残黨を探索なせし趣きなりしかバ只山間に躲るゝのみ迂闊に里へ出ざれバ中々に飢に及ぶもありけん或夜十一人の浪士等が風屋村の近傍なる山小屋に赴きて猪肉を食せんとて頼みて入来りしと言ふ事を彼小屋番の者よりして即時に藤堂新七郎の陣所へ訴へ出しかバ随分徐々給させべき旨差圖をバ倣し置きて豫て浪徒の其中へ間者に入置きたる者に一計を嘱き示し火藥を袂に入れたるを

携へさせて小屋へ遣し更に人数の手配りして件の小屋に火の手揚らバ四方よりして押捕稠え一個も漏らさず搦捕れと指揮して夥兵を繰出せり偖彼間者ハ小屋に到り折を見合せ火を放つべしと命じられたる事なれバ先其動静を窺ふ所十一人の浪士等ハ囲炉裏の端を取巻きて猪肉を煮て居る躰ゆへ介らぬ形状にて裡に入り姑く面を合せざりしが恙なくて最愛し咱們も今に逃端を失ひ山に躲まて居る故に甚だ飢に及びしかバ何ぞ食を需めんと是なる小屋へ来て見れバ君等が居らるゝ躰なるゆへ



近世紀聞 四編巻之二

案内もなく入来たるなり争で我等も仲間に加へてく
尠しく相伴させねへと言ふを見返る浪士等が隊て
面を見知れる者は更に疑ふ気色もなく渠が無事を
も祝しなどして卒這方へと言ひつゝも僅かに円居を
開くにぞ件の間者は嬉しく気に我こ寄らんとせし折
から提たる袋乃紐切れて火薬を傍に取落せしを
一個の浪士が見咎めて夫は何ぞと問かけられ間者は
大いに狼狽なりけん取落したる焔硝袋を拾ひ取る
よと見る間もなく囲炉裏の中へ投込むにぞ袋の火
薬破裂して二人の浪士即死せり尓れども残る九人乃

者は焔火に吹かれ爛れながらも尚も屈せる気色なく
傍にありあふ俵菰など手当次第引冠り小屋の裡より
逃出けり然ば藤堂の夥兵等は相図の火乃手を候程
に火の揚らざる其うちに小屋より浪士乃逃出しなば手筈
は指揮に違ふと雖も須臾も猶豫すべきに在らねば夫と
見るより追逼りて一個は難なく捕へしかど折から暗夜の
吏なれば其他八人の浪士等は何れの谷へか逃入りけん
其夜は行衛の知れざりしが次の日件の八名は紀の國
龍神の方へとく脱れ去らんと為かりしに紀州の兵に
出會て山路に搦捕まれしとぞ斯の如くに四家の藩兵虚間

なく穿鑿為ありしが所々にて残黨捕縛せられ稍十月
の上浣に至り大和の動乱鎮りけり

○平野憤激して澤卿を誘ふ事

却説また平野次郎ハ屢ニ鎮撫の内命を得て大和乃
國に赴きしに幾程もなく十八日の京師の変動聞へし
かバ物取敢ず彼地を去つて帰洛なしつゝ動静を探るに
紛まるからぬ事なれバ慨歎なる事大方ならず軈て
願書を認めて七卿及び毛利家の入洛を歎奏なさんと
雖も朝伸総て入更りて是迄正義と称せし方ハ七卿
外の公卿衆迄何れも幽閉せられし事故平野が願書ハ

貫徹せず虚しく時间を費さんぞ又熟と考ふるに斯る
時変に臨ミてハ微力の及ぶ所に在らバ此上ハ長门
に到りて彼七卿に拜謁して再び攘夷御親征を計
るの外に術なしと直ちに長门に赴きて三條黄门
殿以下の堂上方に謁して言ふやう小生内命を被
りて大和に到りしに夫より先に天忠組にて
五条の知縣を殺戮なし櫻井寺に屯集せし仔細ハ
箇様々々なり然れども尊旨の趣を以て諭達に及
びたるにより彼輩何れも奉命して姑く鎮静の姿を
做せしうち京師の変事聞へしかバ直ちに花洛に立帰り

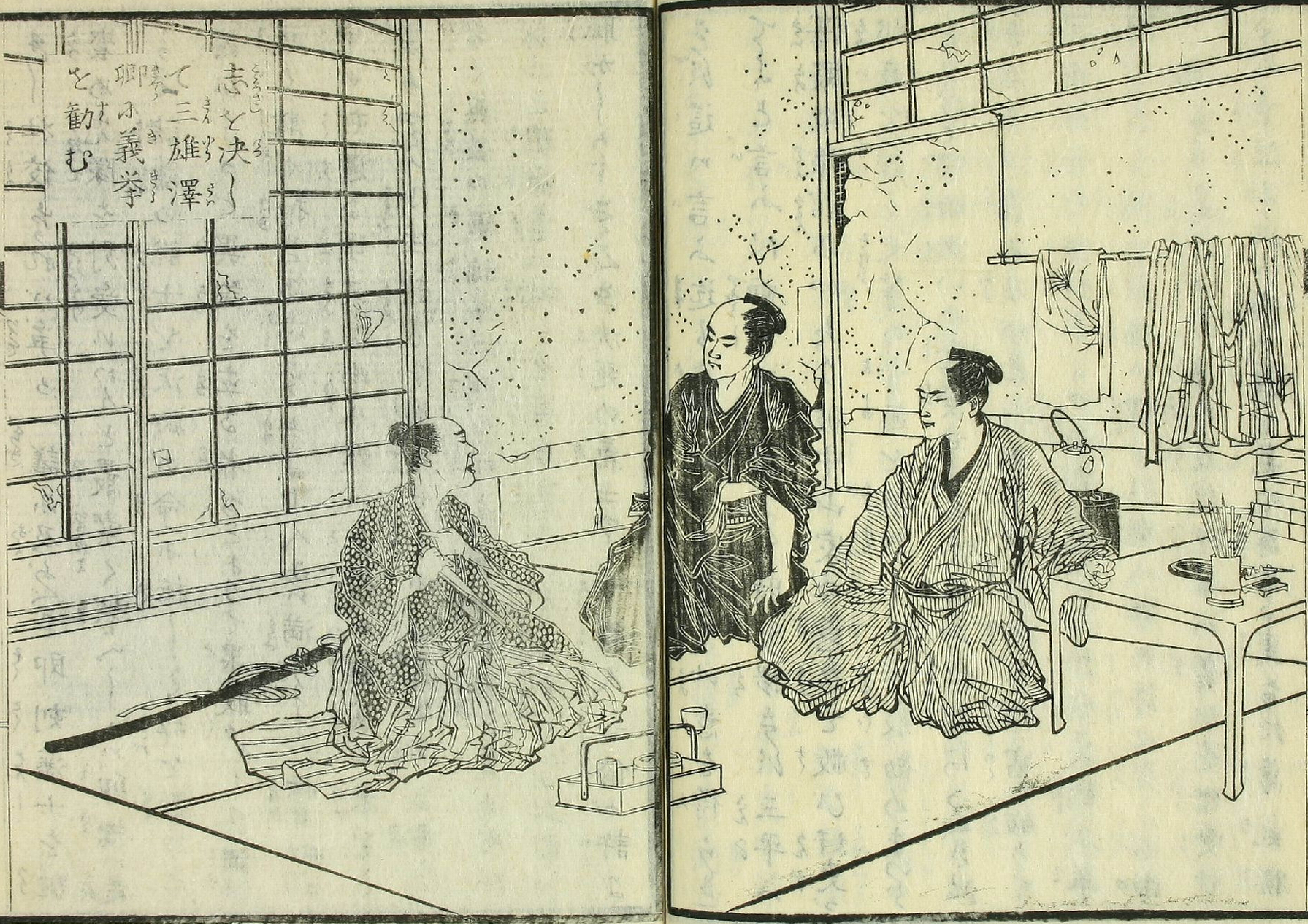
縷々歎奏ふ及びしかど更ふ採用為しなかりバ仍て
這回の変動の起る所を探索するに是全く中川乃
宮と會津の議る所ふ出て朝紳邪辨に醉されぬへバ
幾度公等の冤罪を哀訴ふおよびゆゑも穏便乃
事のミにてハ決して綷ハ運び叵し仍て愚意を
回らさふ今毛利家より数百人の驚衛の士を借受
けて七卿花洛ふ登らせなひ會津等が奸曲を救へ
て強訴ふ及びなバんにハ正邪忽ち判然として
再び攘夷 御親征の朝議ふ復しぬべし是今日の
急務なれバ速かに御所決ありて入洛の御準備遊バ

されよ屑あらねど小生も御供の中ふ加りて一臂の
力を竭さべしと頻りに勧めまつらするを七卿何れも
聞し召まして渠が義気をバ賞しなへど其事暴挙に渉
るを以て肯ひなふ御気色なりねバ次郎ハ望を絶
失ひて一先御座を退きしが其頃薩藩美玉三平秋
月の藩戸原卯橘等此地ふ滞在為たりしが次郎ハ
馳て彼両人の旅宿に至りて對面しつ思ふ仔細を
悉々と物語りけり又言ふやう小生何卒七卿をしめ長
州侯の冤罪を解き是非ふ攘夷を 御親征の再議
ふ至らしめん事只管企望あれど雖も七卿より只我が

説を激論ありしや慓忒まざらん更に採用なしぬれど然りとて此侭に閣くべきの事件にあらねば兄等ハ基是報國の有志是等に就て高論あるべし願はくハ一言を發して微意を遂させたまはずやと言ふをうち听く兩人の中にも美玉三平ハ浩然としてうち頷き言るゝ所義あり信なり其を七卿の肯がはざるハ深慮ありての事なれ知らねど我輩をもて言はせる時ハ因循せらるゝ物の如し尤も豫て澤殿ハ大和に於て中山卿の四家乃討手を引受けて戦争なりしが其よしを听かば可惜正義の廷臣を失ふ事もあらんかと常に苦慮して在けるが我彼の卿に入説せんに中山殿を援くるの趣をもて告る時ハ必らず否とや言る。まじ七卿乃うち一卿にても爰に憤發せらるゝ時ハ又長州の兵士を鼓舞して大和に到り応援なし中山澤の兩卿が合併せらるゝ事に至らバ終に京師へ強訴して奸吏の邪路を絶に及ばん戸原氏にハ此外に尚良策の在けるやと言ひつ傍を見返れバ卯橘ハ完尓とうち咲ておん身の主意寔によし斯て澤殿領策せられしが小生も又一策あり豫て和殿も知らるゝ如く長藩南八郎とハ常に交りを厚うして宛然兄弟の

如くせり我が一言を發する時は素より義氣に數
八郎ならば違背なすべき者にあらず介して渠に周旋
させなば毛利家にても若干の兵士を出すに至らん欲
備夫迄に運ばずとも諸藩乃脱士を煽動せば兵士に
緯を欲く吏ある故に惑ては奈何にぞと言ふところ
听く平野次郎は欣然として小膝を拍め何時に変らぬ
二兄の厚志今更謝するに辞なし今大和には藤本始め
智勇勝れし者多ければ四家の大軍對ふとも輙く敗潰
すべくも在らねど衆寡の差ひあるを以て至急に吏を挙
るにあらずば轍鮒を枯魚の市に尋ぬる後悔あらんも測ら

れば這は言ふ迄も在らねどいと厚く此意を得られよ
てよと言ふに両士は兼諾して時を移さず三平は
澤殿の旅舘にいたり彼中山家の危急を救ひ奸吏が
邪意を拉ぐ丈等の旨趣を演説して万般勧めまゐらす
するほど澤卿大いに奮發せられて遂に出張あるべきむね
旨固く返答は及ばれしかば美玉は頓て旅宿へ皈りて
同意の旨を報知しければ平野は更なり戸原さへ歡ぶ事
限りなく因て卯橘は闇かに南八郎の許に至り来由
を演たる其上にて藩兵及び砲器の屬ひを借受け
られ旨談ずれば南は義を見て為ざる吏なれど勇氣勝


志を決して三雄澤卿に義挙を勧む

きし壮佼なれバ争ゟ一議ニ及ぶべき即刻藩士を駆聚め先隊を引受けんと最潔く答へしかバ卯橋ハ是よりも諸藩の脱士と沢卿の命ニ托して辞を設けて擔ひしかど異論を立る者などありて果敢々々しく調ひ叵く漸く扣きニ応ずる者二十人ニも満ざりしに此日十月朔日申の刻過る頃又彼南八郎ハ戸原の旅宿ニ来りて言ふやう小生諸方を周旋せしニ姑息ニ渉る者のミ多く無益の議論ニ時間を移さバ機會を失ふ吏あやはらんと臆病者ハ残らず省き寔ニ一人当千と言ふべきと耻かしからざるべき決死の義士のミ十餘人吾儕が許ニ

集會せり軍ハ兵の多少ニ仍らねバ疾々出陣然るべしと意気揚々と言出れど美玉戸原の両個ハ餘り兵士の尠き故奈何はらんと惧惑て傍を屹度見返へ此時迄も同席ニ扣へ居たりし平野次郎が南に會釈をなしつゝも膝を找めて言へるやう八郎ぬしの言ハる如く這所ニて兵を聚めんとせバ虚しく時日を費しして果しく機會を失ふべし我听く丹波但馬の辺ニも報國の義士許多あるよし仍て再思を加ふるに今澤卿ニ従ひて但馬ニ到り撒文を廻さバ必す召ニ応ずる者数百人ニ及ぶべし然して大和の摸様を考へ中山卿へ

謀しに合せて縡を謀るに至りしが今は兵士の乏しくそろ
何なる怖ぞ何なる憂ん御船の準備整ひて至急に出
帆致さんと言ふに一同決議に及びて次の日二日周防
の三田尻より僅に一里西に当れる問屋口と言ふ所より
澤殿を始めとして惣勢凡三四十人二艘の船に乗別れて
其夜追風の宜き侭に問屋口を出帆して次の日三日上乃
関に着岸せしに是より風順宜しからば翌日四日正午の頃迄
も船掛りして居る事ゆへ沢殿以下の面々は一日も千秋の思
ひを做せば心頻りに焦燥て遂に其処より上陸して難所を
嫌はず馳る事既にして二日計り懸て同國岩國を經て新湊

と言ふ所より再び船に打乗りしに這回は風順宜しかり
しかば八日の下晡に至りて播州塩濱に着船せり其時
平野次郎が言ふやう船中大いに虚間取りて測らず
數日を歴し事故大和の動靜京師の摸樣更に考へ
知りがたし今宵小生姫路に至りて篤と探索なすべしとて
藤野四郎と喚ばるゝ一個の同志を伴ひて艀にて哨船に乗
移り陸路をさして赴きしが其次の朝九日平野等より澤
卿の船に昏簡を送り餝間の浦へ御船を廻さるべきむね
言越せしかば艀にて篙工に命じて船を餝間へ廻せし程に昏
に及びて着岸せり案下平野藤野の二個は件の浦辺に

出迎へく今宵ハ当所に然るべき御宿を設け置たりしが何れも上陸なすべしとく彼両名が誘引しつ旅籠屋めきたる家に伴ひ各席に着たる時平野ハ其処に找ミ出で不思議の大変出来せりと言ふに一同駭きて其ハ又何等の変事ぞと辞約しく問掛たれバ必竟次郎が返荅ハ奈何に次の巻を看て知るべし

近世紀聞四編巻之一　終

早稲田大学図書館
011688996033